

デンマークの文化とデザインを学ぶ

住み慣れた日本を一步離れ、異国の地に立つと日本との文化の違いが見えてくる。訪れたデンマーク文化の中でも、人々の普通の暮らしの中での文化は何だろうと、私たちは興味をもった。

また、北欧と言えば、小さな雑貨から、大きな街並みやインテリア等、あらゆる面でデザインがおしゃれというイメージがある。自らの足で歩いて、目にして、デンマークならではのデザインを探した。



デンマークの文化 灯りの街



日が暮れたコペンハーゲン空港から街中に入ってきて、衝撃的なものが目に入ってきた。マンションである。すべての住戸が丸見え。カーテンがない。白熱灯に照らされたモデルハウスのように、おしゃれなりビングの生活空間が丸見えである。

コペンハーゲンで食事に訪れたレストランや、研修先であるマリーイエメン財団の施設に一步足を踏み入ると薄暗い。最初は暗さに慣れなかったが、滞在日数を重ねるうちに心地よい。「この心地良さはなんだろう」。それは薄暗い食卓の真ん中のロウソクの灯りであった。手をかざすとほのかに暖かく、アンデルセン童話のマッチ売りの少女の物語を思い出した。この明るさで十分であることに気づかされた。灯（ともしび）を見ていると穏やかになった。添乗員の渡辺さんから、「灯りで精神が変わる」という文化の国であること、北欧ではロウソクだけで過ごす習慣があることを学んだ。明るすぎない生活からも、デンマーク人の無駄のない生活文化がうかがえた。

ロウソクの灯りとともに、建物に明るさを与えてくれる間接照明。日本では LED の光が主流になってきたが、夜が長いデンマークでは、様々なデザインの白熱球の照明器具が人々に癒しを与えていた。

コペンハーゲンの街灯りと言えば、夕暮れ時に運河から眺めるニューハウンの街並みで、日本のように明るすぎない。ネオンサインや電照看板が少ない。日暮れとともにひとつ、ふたつと灯りがともった。ゆっくりと進む遊覧ボートから眺める街並みは、オレンジ色の灯りが建物と調和され、デザインの国デンマークらしい空間を作りあげ、何とも言えない癒しの景色だった。



レストランの灯り



夕暮れのニューハウン



マリーイエメン財団施設内
ダイニングの灯り



シンプルで機能的なデンマークのデザイン



デンマークのデザインを学ぶために国立博物館見学へ行った。外観は中世ヨーロッパの歴史ある建物で、そこが国立博物館であるとは気づきにくい。ここで福祉先進国を実感したのは、レンタル車イスやベビーカーの横にレンタル歩行器が並んでいたことである。

通勤時間帯のベビーカー付き三輪自転車の多さにも驚いた。



国立博物館の院内に並べられている歩行器や車イス



三輪自転車に付いたベビーカーの多さにも驚いた。安全性も抜群。

●道路デザイン コペンハーゲン市街地は車道・自転車道・歩道に3区分されており、アスファルト仕上げの車道、自転車道と、石畳の歩道という造りになっている。幅の広い道路を横断するには歩行者用信号が短く、慌てて走って渡り「歩行者にやさしくない」と思うほど。間に合わない時は中央安全地帯に留まる。情緒ある石畳に不慣れな私たちは歩きにくかったが、デンマーク人は皆、歩き易そうな靴でさっそうと歩いていた。



デンマークの三輪自転車にもってこの信号機。

●心のデザイン 自転車は、ラッシュ時ともなると、速いスピードで絶え間なく行きかうので道を渡るのも怖かったが、歩行者に気づけばちゃんと止まってくれる。横断する人がいれば停止するのが当たり前前で、それが国民に身につけているようだ。人を大切にする心が生活の中に自然にあった。

●生き方デザイン

無駄なものを省くシンプルな生活。ガソリンを使う車より自転車。服装もシンプルな装いが多い。薄灯りの生活も電気を大切にする国民性。

日本でもお馴染みの知育ブロックの玩具メーカーLEGO ショップでは、パッケージの色を性別によって区別しない。黒や青、赤やピンク等の色分けはなく、黄色や紫などの中間色のパッケージだった。トイレの男女マークにも色分けはなかった。



知育ブロック



トイレの男女マーク

B 班自主研修

アクティビティセンター併設型 高齢者住宅

ペダー・ルカ・センター 「Peder Lykke Centret」



多様な文化の共生と一人ひとりの尊重を目指す

コペンハーゲン・コムーネにある高齢者施設(高齢者のアクティビティセンターと高齢者住宅併設)ペダールカセンターは、コペンハーゲン最大のケアセンターであると同時に、デンマークでは初めての試みである、多様な文化の共生を目指した施設。



センター長のメッテ・オルセンさん スタッフは制服や名札を着用しない。

センターは3つのゾーンに分かれている。1つ目は、アクティビティセンター。図書室、調理室(男性の料理実習や糖尿病食の教室)、ジム、講習会があり、哲学や太極拳も学べる生涯学習施設で、現在近郊から65歳以上の320人程の利用登録がある。月107DKK(日本円で約2,200円)で利用可能。2つ目は、生活ゾーンで、コミュニティーセンター、コーヒーショップ、リビングルーム、フットケア等のマッサージルーム、売店がある。医師や歯科医、美容師もおり、入居者のそれぞれの文化・多様性に対応している。3つ目は、高齢者住宅で現在78人が生活していた。入居者は希望する限り、認知症や終末期医療が必要となってもここで最後まで生活することができる。



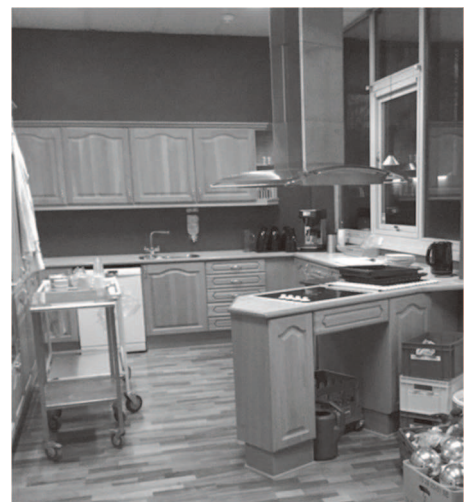
入居者の文化や人生をありのまま受け入れる職員教育

センターの大きな特徴として、入居者がどんな宗教や国の出身であっても、受け入れるという方針がある。スタッフは、まず入居者自身にその人生、習慣、性的指向、どんな文化の中で生きてきたか、どんな希望を持っているかを話してもらい、いっさい批判、否定しない(たとえそれがアルコール依存症や家族との問題を抱えている人でも)。その文化や価値観をスタッフみんなが学び、共有する。



工作室やPCルームもあり、65歳以上の高齢者であれば近隣住民も利用できる。

センターには、ケースワーカー・介護士・医師・看護師・保健師・理学療法士・作業療法士・教育者など24カ国・140人もの多職種のスタッフが勤務(うち60人はパートタイム)。その他にも地域のボランティアスタッフで作るカルチャーネットワークがあり、パキスタンやアラブなどのお祭りなどはそうした人たちが企画している。



家族や友人と料理を作るためのキッチン。この時期はクリスマスクッキーが作られていた。

そこが聞きたい! Q & A

Q. 認知症の徘徊などにはどう対応。

A. 現在、入居者は65%が認知症で、そのうち10%~15%が精神疾患がある。基本的には強制や制限することはなく、理解してもらうようにしている。GPSを本人の承諾を得て腕につけ、外すのも自由。外出も自由。家族が来る日にはバーベキューや、小さなダイニングで別に食事をとることもできる。もちろんアルコールも可。

Q. 職員の身分は。

A. 3交代で正規職員が勤務。他は、アシスタントパートタイム、実習生が20人(資格習得のために学生に義務づけられた研修で、卒業後に雇用契約を結ぶ施設に入る)。

Q. 公的年金に対して入居費用の個人負担は。

A. 平均の年金額が1万DKK(個人年金は除く)。部屋代2,250DKK、暖房300DKK、電気270DKK、その他食費など総額で8,000DKK(日本円で約16万円)でまかなえる。

Q. 要介護度を認定するシステムは。

A. 評価する機関はある。ホームヘルパーや社会福祉士が1日に5~6回訪問する必要があると判断すれば、高齢者住宅に引っ越しを勧める。本人が判断できなければ後見人が行う。

Q. 待機問題は。

A. ウェイティングリストはあり、3施設くらい希望を聞いて対応する。院から退院した場合の暫定的な入居も可能。

Q. 終末期医療は。

アンケート協力者…12人

TDC



Question